

Title	モンテーニュの均衡
Author(s)	杉山, 京介
Citation	Francia (1959), 3: 1-10
Issue Date	1959-08-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/137458">http://hdl.handle.net/2433/137458</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# モンテーニュの均衡

杉 山 京 介

## 序 不可解な人物

モンテーニュは一筋縄ではすり抜けてしまう。彼の残した「エッセ」三巻が混沌とした印象を免れないように、人々の見方も様々である。モンテーニュの呼び名の何と多いことか。曰く、懷疑主義者・ストア主義者・快樂主義者・無神論者・エゴチスト・シレッタント等々。これらの定義はすべて彼にあてはまるようで、それでいて彼の全体を示すものではない。彼の魅力は人々の心を捉えており、その偉大さは誰もが知っている。だが彼は多くの人々の究明の手を逃れ、彼に対する評価は一定していない。自我を描き、自己を他人に知らしめるべく筆を執った彼にあつて何という皮肉ノ

従来の研究は、彼が懷疑主義者か否か、信者かそれとも無神論者か、ということに若干拘泥しすぎた向がある。だがモンテーニュを一語で定義することは不可能に近く、さして重要なことでもない。實際右に挙げた様々の定義もそれ相応の根拠がある。

ヴィレヤストロフスキーに代表される立場、つまりモンテーニュ

の思想は、ストア主義↓懷疑主義↓快樂主義、或いはソクラテ斯的叡智の三段階を経て発展したとする説もまた有力である。成程個人の思想が時代的に変化するのは当然だが、その変化の底には終始変らぬ一筋の流れが潜んでいるのではなからうか。たとえその思想が変るにせよ、彼独自の思考方法や発想法は生涯変らなかつたのではないか、と思われる。

そこで私は敢えてモンテーニュに関する一切の名称を捨て、見ろ。そして彼が瞑想にふけり、筆を運ばせる所の彼の流儀に注目したいと思う。できる限り彼を全体として捉え、たえず動きやすいこの人間に見出される或る種の安定（それをこゝでは「均衡」と呼びたい）を示そうと思う。そして彼が誤解されやすい原因を指摘し、ひいてはエッセ *essais* とはどういうことか、に少しでも迫り得れば幸いである。

# 1 混乱に現れた均斉

P. Vilely Paris, Alcan 1922

「エセ」を一読して感じるのは、思想と文章の自由な歩みとくろぎである。彼は構成や脈絡に頓着せず、想像力の赴くまゝに筆を進めた。彼の意識の流れは「エセ」の各頁に何の淀もなく生々と写し出されている。モンテーニュの文体の特徴、それは自然な *natural* に他ならない。

所で、この自然な文体にもう一つの特徴がある。それは何かと言へば文中随所に見出される対句である。彼は整然たる対句で主張を繰り返し、逆説や諷刺で人の心を打つ。確かに対句 *antithèse* の多用はモンテーニュの文体の特徴といつてよい。例を挙げよう。(対句を強調するために最初から図式的に示す)

{ Le monde regarde toujours vis à vis;  
Moy, je reprie ma vèue au deïars,  
je la plante, je l'amuse là.

{ Chacun regarde devant soy;  
Moy je regarde dedans moy;

je n'ay affaire qu'à moy, je me considere sans cess,  
je me contrefoile, je me goust.

{ Les autres vont toujours aïleur, s'ils y pensent bien;  
Ils vont tousioirs avant, Nemo in sese tentat descendere,  
Moy je me roïje en moy mesme. (t. I, chap. XIII,  
p. 443)

註 引用テキストは Les Essais de Michel de Montaigne par

一瞥するやこの一節の見事な均斉が目に見える。——詩のように音節数迄が殆ど同じ長さの文章の並列、二つの命題の数度に渡る繰返し(枝葉部分の変化は単調化を防いでいる)、同語の反復および反対語の多用。こうした対句によつて自我の内面凝視と世間一般の外見判断は対比され、彼の主張は鮮やかに浮き彫りされている。更にもう一つの例を引こう。

Chacun fuit à le voir naistre, chacun suit à le voir mourir.

{ Pour le destruire, on cerche un champ spacieux en  
pleine lumière;  
pour le construire, on se musse dans un creux tenebreux  
et contraint.

{ C'est le devoir de se cacher et rougir pour le faire;  
et c'est gloire, et na sent plus leurs vertus de le sçavoir  
deffaire.

L'un est injure, l'autre est grace. (I, V, 126)

こゝでは特に心像の対照が効果的である。モンテーニュは、人間の生活の一部を占める性を無視するには及ぶまい、と言うに過ぎぬ。所でこの一節に至るや突如、生殖に対立する心像として殺人が持ち出された。そして生と死の対照によつて、不潔視されがちな性を明るみに出し、(前後の文脈からすれば唐突の感は免れないが) 殺

人、更には戦争に対する鋭い批判をなしている。

そして対句の構成は緊密で完全に均齊がとれている。中でも *suit, destitue-construire, devoir-gloire* の対比はあまりに巧みで、修辭的技巧、或いは語と音の遊戲と評されるかも知れぬ。そしてこの一節は最初の文章に後年加筆訂正されてこの形をとったものだけに、なお更批判の余地もあろう。だがこれ程完璧な対句を作り上げた技巧には、均齊と対照を追求する作者の強い好み *goût* が現れているのではなからうか。更に二、三の例を引くのも無駄ではあるまい。

○ Elle (=la mort) ne vous concerne n'y mort, ny vif; parce que vous êtes: mort, parce que vous n'êtes plus. (I, XX, 113)

○ Quand je pourroy me faire craindre, J'aimeirov encore mieux me faire aymer. (II, VII, 35)

○ Peu de chose nous divertit etdesto-une, car peu de chose nous tent. (III, 71, 70)

右の引用文から次のことが明らかである。

(一) これらの文章はモンテーニュの觀念や思想の結晶ともいふべき格率と警句である。

(二) 文章の構成は幾何学的に左右対照をなしている。意味はともかく、視覚的な均齊と安定感がある。

(三) 語句・心像・觀念において全く対立する。互に一方が他方を否定することによって、お互が益々強調されている。どちらかとい

えば逆説的表現で、多分に諷刺を含む。

(四) かゝる対句の用例は「エセ」に無数に見出される。

(五) 秩序と均衡が全体を支配し、觀念は明瞭で、いささかも悔渋ではない。

自由奔放で錯綜した「エセ」の文中に、こうした秩序と均衡を見出すのは、真に興味深い。筆の流れるに任せた自然な文体、敏捷な精神の躍動にとつて、対句はむしろ異質の分子ともいえるからである。

## 2 対句の意義

最初に我々は、これらの対句が單なる修辭的技巧或いは模倣ではないか、という疑問に答える必要がある。實際モンテーニュの対句愛用は、彼の母國語ともいえるラテン語の影響であり、特にセネカに負う所多のことは研究者の指摘する通りである。又十六世紀は対句氾濫の時代でもあった。

これに対し特に次の二点を強調したい。即ち対句の用例が非常に多いこと、及び彼の中心思想が特に対句という表現をとつてのことである。たとえ古代作家や時代風潮の影響はあるにしても、このことは対句が彼の文体の血となり肉と化したことを意味する。

更に文体は單なる外部的形式ではなく、作家の見方や思想を如実に反映するものである。思想は言語の媒介を経てこそ初めて現れることができる。作家の世界觀は文体のうちに深く浸みこんでいるものだ。我々はモンテーニュの対句を、單に修辭上の常套手段として見逃すことなく、一歩進んで彼の精神活動の現れと解すべきであらう。

う。

「エセ」の各章は構成が散漫で起承転結を欠く。だがそれだけに彼は心の赴くまゝに筆を振い、「エセ」には彼の意識の移り変りがそのまゝ写し出されている。この精神はいつも潑刺としていて留まることを知らぬ。読者が彼の歩調に従うことができなくても、後は氣儘に獲物を追いかける。従つて「エセ」においては全体よりも細部に彼の才能が発揮されている。

そしてこの対句は右といへば左、黒には白と即刻応ずる彼の精神の潑刺とした動きを示すものである。彼が対句を並べる時、その継ぎ目を氣にかけず、(セミ)コロン位ですまして、矢次早に多種多様な心像を繰り出してくる。彼はあくまで自己の想像力の湧き出るにまかせ、飛躍や唐突さが読者を驚かそうが頓着しない。

我々はこれらの対句の上に、一方から他方へ、又その逆にと二つの対象の間を往復する敏捷な律動的精神を目のあたりにする。フランス庭園に見られる静止した均斉ではなく、運動の規則的なリズムを感じるのである。更に幾何学的な対称を構成す美しい対句は、彼が均衡と秩序を深く愛したことを意味する。対句が一方を肯定し他方を否定する効果的手段であるにせよ、彼は各語句にそれぞれ対応する観念や心像を並べないと満足しない、彼は意見の是否よりも、むしろ表現上の均衡に安定感を見出しているかに見える。

こうして対句という表現形式を愛用する精神は均衡を愛する精神であるといえる。均衡は単に表現だけに留まらず、広く思想や観念にも及んでいる。この事情を裏書きする如く、彼が「天秤」の心像を好んで使っていることを我々はあわせて知るのである。

### 3 天秤とその均衡

モンテーニュの所謂懷疑主義の標語は、あの有名な言葉 *« Je me sçay peu »* である。人々はこの言葉が均衡のとれた天秤の上に書かれていたことを忘れがちだ。(一五七六年、彼は銅牌の片面に紋章、一面に天秤とそしてギリシヤ語で「判断をさし控える」の文字を刻ませた。)この均衡状態の天秤にピロン風の判断中止、判断の無力の象徴を見る人もいるだろう。だが私はこゝにモンテーニュの安定した精神と均衡に対する強い好みを見たい。それはともかく、このメダル以外にも彼は屢々天秤の心像を思い浮べる。実際、天秤 *balance* という語や、天秤の心像を踏えた表現がかなり多いのである。

○ ..... *iy* (= *aux desordemens*) apporte trop peu de resistance, et me laisse trop aisement pancher à l'autre part de la balance,..... (II. M. 135)

○ Si la repentance pèsait sur le plat de la balance, elle en-porteroit le péché. (II. II. 38)

○ Où l'un plat est vuide du tout en la balance, je laisse vaciller l'autre, sous les songes d'une vieille. (II. VII. 135) cf. II. M. 319; II. XIV. 470; II. XXIII. 531; II. VII. 135, II. I. 438.

天秤は古来正義の象徴とされている。彼は偏見を捨て何事に対しても絶対に公正中立であらうとする。そしてすべてを自らの手で秤

量し試そうとする。彼にあつては *Penser* (考える) とは *Pecher* (重さを計ること) に他ならない。彼の判断こそこの天秤であつて、二つの皿で問題の微妙な相異を判別してゐる。この場合鑑別の対象は、相異なる二つのもの、両極端の観念である。

対句において正反對の語句や心像が対比されたように、彼が好んで取扱つた主題にも明白な二つの対立が認められる。彼は死について語る時は生について、自我を描く場合には世間一般の人間に触れずにはいない。こうして彼得意の話題は、たちまち幾組かの対になつてしまふ。即ち次のように、肉体||精神、病氣||健康、青春||老年、秩序||混乱、人為||自然、快樂||苦痛。彼の議論はいつもこうした二本の柱に支えられている(尤も彼によれば、こうした一見明瞭な対立概念の識別はまことに微妙で困難なのである)。

彼は一面的な見方では決して納得せず、目的とする対象に様々な側面から攻撃してみる。視点を一箇所に固定せず、始終移動を好む彼が或る対象を見る時、対象を通して逆に自己を見つめる余裕がある。《*Quand je me joue à ma chatte, qui sait si elle passe son temps de moy plus que je ne fay delle.*》(I. M. 165) かくに何事も信ずることはできぬ深刻な懷疑を、ヴィレのいう精神的危機《*la crise pyrronienne*》を見るべきだろうか。そして又暖かい部屋にいて嵐の野原を、健康な時に病氣のことを、歡樂の最中に死を思つてゐる (II, IV, 57) この人間はたえず不安に怯え、まだこゝろ不幸に備へているのであろうか。そうではあるまい。むしろそこに一箇所に留まることを快しとせず、視点を動かさずにはおれぬ潑刺たる精神を見るべきだろう。不安におのゝく精神ではなく、足

下に大地の固さを感じながらも、常に新たな活動の場を求めて止まぬ精神なのだ。彼は移動によつて自己の安定を失ふことなく、またモンテーニユの懷疑は躍動と均衡を求める精神の産物に他ならない。

#### 4 対立と矛盾

モンテーニユは何事にも無関心ではない。果知らぬ好奇心は彼をあらゆる時代、ありとあらゆる世界の人間の傍に導いて行く。その結果「エセ」には種々雑多な意見が混然と入り込み、数々の矛盾が見出される。誰しもが思はず漏らす、「一体モンテーニユは何を言わんとし、又彼自身どの意見に賛成しているのか」と。茫漠とした「エセ」の各章から、著者の真意を汲取るとは容易でない。

あの膨大で晦渋な「レイモン・スボン弁護」を見よ。はたして彼はスボンの思想を弁護しているのか、いないのか? この他にもいつとはなく消えて結論の曖昧な章はいくつもある。こうした晦渋を、微妙な宗教問題に渡する場合に教会や狂信者の非難を避けるべく用いた詭晦手段、と見る向もあるがどうだろう。

ともかく矛盾や諸観念の対立は「エセ」の特色であり魅力でもある。彼は意識的に、自ら進んで反對意見を求める。《*Maintes-fois avant pris pour exercice et pour esbat à maintenir une contraire opinion à la mienne, mon esprit, s'apicant et tournant de ce côté là, m'y attaque si bien que je ne trouve plus la raison de mon premier avis, et m'en depars.*》(II. M. 320) 反對意見を自分の意見と噛合せ対比させること、これが判断の試し、essais な

のである。活潑な精神は眠ることを厭い、刺戟を求める。そしてそれが彼の大の楽しみなのだ。

三巻八章の「議論の方法について」では彼は精神を鍛えるに最も有効な方法として議論を勧めている。たとえそれがつまらぬことでも又反対意見でも彼は喜んで耳を貸す。反対者をいさかか容赦せぬ狂信主義の時代に見せた彼の寛容と社交人としての面目がこゝに躍如としている。もし真理が発見されるならば、たとえ敵の側であっても彼は潔く兜を脱ぐであらう。

彼が健気な決心を固めていても、そう易々と真理は見つかるものではない。抑々人間は絶対的真理に到達可能かどうか、彼自身も疑問に思っている。更に賢人モンテニユにあつては、相手の真理に降伏することは極めて少なかつたと思わねばならぬ。何故なら彼は自己の判断の正しさに相当自信を持っており、彼が反対意見を受入れる背後には、何か超脱した様子が見える。《Il ne craint peu de la matière, et ne sont les opinions ures, et la victoire du sujet à peu près indifférente.》(Ⅲ.Ⅷ. 188) 「エヤ」には実に様々な思想が混り合い、入乱れて互に相反し合っている。そして競技場から一段と高い観覧席で、モンテニユがこの葛藤を面白そうに眺めているかのようだ。そこには或る種の無関心が、勝負を離れて競技そのものを楽しむ観客の態度が窺われる。プレヴォ・パドールは彼独特のこの流儀を巧みに次のように評している。即ち、「彼は一つの意見から他の意見へと行来するうちに、最後に両者から等距離に留まってしまう。丁度微かに何度か揺れた振子が均衡を取戻し再び静止するように」と。(Prévoist-Paradoi: Études sur les moralistes français p.16) 何か一つの観念が彼の心に生ずるや否や、

声に響か反響するように、反対の観念が湧き起ってくる。これは対句や天秤の心像に見られる通りである、そして対句の均斉には左右相称の中心があり、天秤には二つの皿の釣合をとる測定者がいるのと同じく同様に、観念や思想においてもその対立によって均衡が生み出され、この均衡を常に保持する客観的な第三者が現れる。いわばモンテニユは、二等辺三角形の頂点に立ち、他の二点から等距離に位置することによって自己の均衡を保っているのだ。それ故モンテニユに見られる均衡は、彼の客観性と表裏一体のものなのである。

同時代のユマニスト達と同様に、彼もまたあらゆる事柄に積極的に関与した。彼は何事にも飽くことのない興味を示したが、それでいて、ある特定の何かに溺れてしまうこともなかつた。その熱意と好奇心にも拘らず、彼はいつも客観性を維持する。そこでこの辺に彼の秘密が潜むように思われる。即ち、一方では彼は経験を重ねし現実を直視して、極力対象と一致しようと努める。彼は自ら新大陸の土人達 cannibales と語り合(一五六二年)、魔女を獄舎に訪れた(三巻十一章)。生来放浪を好み、旅行の際には各地方特有の習慣に従い、同国人を避けて外国人と交わる機会を求める。モンテニユはまず対象と一致することによって学び、思索を深める。彼の思想が宙に浮ぶことなく現実と確固とした根を下しているのも当然のことである。

だが他方では彼はあらゆる対象を、自己すらも客観視し、常に自己と対象との間に一定の間隔を保っている。かくして彼は宗教戦争の野を吹捲った狂信主義に染みず、何事につけ冷静にして公正な判断を下し得た(両棲動物ながら敵味方から攻撃されつつも)。

確かにモンテーニュには二つの瞬間がある。一つは熱中の瞬間であり、一つは無関心の瞬間である。現実につかず離れず、熱中と超脱を自在になし得る所に、彼の特色がある。或はこれが所謂《essais》の真髓でもあろうか。《Le jugement est un util à tous subjects, et se mesle par tout. A cette cause, aux essais que j'en fay ici, j'y emploie toute sorte d'occasion. Si c'est un subject que je nentende point, à cela mesme je l'essaye, sondant le gré de bien loing; et puis, le trouvant trop profond pour ma taille, je me tiens à la rive: et cette reconnaissance de ne pouvoir passer outre, c'est un trait de son effect, voire de ceux dequoy il se vante le plus.》(I. L. 383)

彼は流れに身を浸すものゝ、溺れることを恐れている。難解な箇所につかつた時、一二度當つてみて後は放つておく、と嘯く彼の説書法(二巻十一章)も同様の考えを示している。行ける所迄はずんずん進む、そしてもうこれ以上進めぬと知つた時の身の引きつりのよさ、これが「エセ」の特色である。眠ろうと努めても眠れるものではない、強く心にのしかつてくる事にさえ敢えて無関心となり得る偉さ。そしてこの特異さが時には誤解の要因ともなる。

彼は屢々「怪奇で浮動常なき」人間、或いは冷笑的な皮肉屋と見られてきた。アルマンゴはモンテーニュを首尾一貫した確固たる人間として示そうと努め、彼が不安定と見なされる原因として、彼の中に二つの性格——はじめなモラリストと皮肉なシレッタントが拮抗することを挙げづらる。(cf. Armaingaud: Étude sur Michel de Montaigne chap. V.) しかし私はこの両者もやはり一つのものとして捉えたい。何事も偏見なく観察する習慣なくしては、

公正な批判はあり得ず、又対象から離れる余裕あればこそ、諷刺や機智が生れるのだ。

勿論モラリストとしての彼の秀れた素質はいう迄もない。比較を好み均衡を尊ぶ彼の流儀は風俗の批判や諷刺にその力を存分に振う。彼は同時代を遠く離れて、古代人や外国人、時には動物の目を通じて物事を見る。そのとらわれない見方、余裕のある懷疑は思想の習慣性を打破する効果がある。

彼はありのまゝに盾の面を見せるわけである。世人の如く影の部分から目を背けようとはしない。人々がとかく見逃すことをそれと注意するので、時には曝露趣味、シニスムと評されることになる。

事実モンテーニュは好んで皇帝や哲学者も亦便器や女性に跨がることに注意を喚起した。たとえ身分や文化が異なるにせよ、所詮人間には股引の違いしかないことを説いた。その傲慢さを裏切る「孔雀の足」(三巻五章)を指摘する彼の諷刺は、一方に偏向せず両極を見較べる対句愛好の精神のいわば副産物に他ならない。

## 5 精神と肉體

何事につけまず均衡を重んじるモンテーニュが、モラルにおいても、極端を避け中庸を理想とするのは当然である。即ち釣合のとれた心身の調和こそ彼のモラルの根底をなすのである。

ソクラテスを思い出させるモンテーニュは所謂「生きる術」*art de vivre*を十分心得ている。ストア主義者ながら、彼は動揺しやすく不安定な自我を、飽くまで理性によって統御せんと努力した。社会風俗はいかに腐敗を極めようと、自己の内部のみは秩序あるも



のにしようという意識が、彼の中には強く働いている。ランソンも書いている。「ordre, règle, règlement, régler (秩序)」という語が何と屢々現れてくることだろう。モンテーニュは偶然のなるにまかせ、展開し急変する環境や情念によって左右に押し流されるような生き方を望まない。彼は理性に従って自己の生を導びこうと思っている。(G. Lanson: Les Essais de Montaigne p. 136) 不安定・変化・動揺・混乱等の語が多いだけに又、節度・秩序・規律等の語も繰返し出てくる。ただこゝで注意すべきはモンテーニュのいう秩序とは単に情念に対する精神の支配を指すのではなく、精神と肉体の均衡のとれた歩みというのである。

その原因が腎臓結石によるものか或いは青年期の放縱のせいかは暫く措くとしてモンテーニュは割合に早く老いこんだようである。

青春と健康を常に何よりも讃美した彼が、陰気な老の坂道にさしかかった時、どのように対処するであろうか。まず彼はわる足掻きせずじっと不幸に耐え、徐々に若さを取戻そうとする。青春時代には、力と欲慕にみぎる肉体を精神によって極力制御に努める必要がある。所が憂うつな老年にはこの逆を行かねばならぬ。人の意表に出る次の逆説を見よ。《Parquoy je me laisse à cette heure aller un peu à la desbauche par dessein;... Je me defiens de la temperance comme l'ay fait autrefois de la volupté. Elle me tire trop arriere, et jusques à la stupidité. Or je veux estre maistre de moy, à tout sens. La sagesse a ses excès, et n'a pas moins besoin de moderation que la folie.》(Ⅲ. V. 76-77) こゝでは自己を秩序づける具体的方法に注目しよう。普通一般のモデルでは(例えばストア主義、キリスト教など)、肉体或いは情

念 passion を汚らしいものとして、ひたすら精神力でこれを抑制すべきことが説かれる。均衡を尊重し心身を同等視するモンテーニュは、それだけに留まらず、却って肉体により精神に働きかけようとする。肉体又は情念による精神の鼓舞、これが彼独特の自己掌握の方法である。

モンテーニュはデカルトのような厳密な二元論を主張したわけではないが、精神と身体とを区別して考え、自らの経験によって心身相互に密接な関係のあることを知っていた。感受性が豊かで繊細な彼は、身体の微妙な変化で、精神的機能がどれほど影響を蒙るかを氣附かずにはいなかった。心身相關説に立つ彼の理想は、どちらか一方の偏重ではなく、両者相互の働きによる自己規制である。彼は教育においては魂だけでなく筋肉をも鍛練すべきことを勧めている(一卷二六章)。

かように人間は精神と身体の両方から成る存在であるのに、人々はやゝもすればこのことを忘れ、とかく一方の優位を強調したがる。ストア主義者やキリスト教徒は人間を純粹の精神とでも考えているのだろうか。モンテーニュはあの豪放な恋愛論「ヴィルジルの詩句について」を書残したお蔭で、彼は恋愛に関して放縱で肉体的快樂のみを追求したかのように見られやすい。しかしながら彼は恋愛における肉体の存在を無視すべきではないこと、精神と肉体とは切離せず一体であることを説くことに過ぎない。《Le corps a une grand part à nostre estre, il y tient un grand rang;... Ceux qui veulent desprendre nos deux pieces principales et les sequester l'une de l'autre, ils ont tort. Au rebours, il les faut raccopter et rejoindre》(Ⅰ. XIV. 419)

一体彼のモラルはすべて、事物の凹凸を均し水平化することにある。そこには人を熱狂に駆り立てはしないが、歪曲されたものを本来の姿に戻す働きがある。それは人為 *art* より自然 *nature* へ復帰することであるともいえよう。モンテーニュは「美しい天上のもの」(精神)を引下し、「墮落した地上のもの」(肉体)を引上げて両者を同一平面に並べたのである。従来輕蔑されてきた人間性の一面を復活させた点は、まさにユマニズムの精神である。

そればかりではない、目覚めたる意識を持つ彼は更に積極的に精神を感覺的快樂に親しく結合して、快樂を一層深いものにしようとする。古代人の如くルネッサンス人モンテーニュはいつも青春と健康を讚美し、生命への愛を歌っている。彼が悲哀を嫌惡し真剣に快樂を追求したとて何のふしきがあろうか。《Jusques aux moindres occasions de plaisir que je puis rencontrer, je les emploie.》

(Ⅱ.V.70)

彼は子供の頃、その幼ない頭腦を乱さないようにという父親の配慮から毎朝音楽で起された(一卷二六章)。決して眠りを邪魔されることもなく、又「生涯睡眠を中断するような考えを抱いたこともない」(三卷一三章)と自負する彼が、いかなる試みを行うであらうか。次の一節。《A celle fin que le dormir mesme ne m'eschapât ainsi stupidement, j'ay autrefois trouvé bon qu'on me le trobat pour que j'enrevisse》(Ⅱ.XⅢ.445) 何とぞう探求好きな精神ノ自ら絶てを試みずにはおれない貪欲な精神の活動ノそして《essais》の本領がこゝにも現れている。

こうした例から明らかなように彼は快樂、ひいては人生が無自覚のうちに流れ去ることを極度に嫌った。彼は生の一瞬一瞬を意識し

つつ、生のあらゆる果実を味わい尽そうという激しい欲求を持っている。流れに身を委ねて生きるのではなく、よき瞬間を正視して十分噛みしめようとする。どんな些細な快樂をも逃さず吟味し、これを拡大延長せんとする。意識を感覺的快樂に緊密に結びつければ満足は一層深いものとなる。《Me trouve-je en quelque assiete tranquille? y a il quelque volupté qui me chatouille? je ne la laisse pas friponner aux sens, j'y associe mon ame, non pas pour s'y engager, mais pour s'y agreeer, non pas pour s'y perdre, mais pour s'y trouver; et j'emploie de sa part à se mirer dans ce prospere estat, à en poiser et estimer le bon heur et amplifier.》(Ⅱ.XⅢ.445) 一の對句的構成にもう一度注目しよう。このように「ユヤ」三卷十三章最後の教頁には、モンテーニュが生涯の経験と探求の結果到達した智恵、或る種の悟りとが披露されている。到る所彼独特の「生きる術」が鋳めてあり、彼の魂の静穩には神々しいものさえ感じとれる。

### むすび モンテーニュの生

我々は對句を特徴とするモンテーニュの文体から出発して、こゝで彼の世界觀の問題に到達した。彼の様々な面に現れた均衡は、彼の生き方、世界觀と一体どのような關係にあるのだろうか。この点を考察してこの一文の結びとしたい。

モンテーニュは生の多様性及び變化を自覺している。彼は自己の内部も、又外部の世界も共に川の流に絶えず流れ去ることを認識した。自己そして人間一般がいかに不安定で変りやすい存在である

かを感じ得た。《*vain, divers, et ondoyant*》(I. I. 8) という人間性の定義は、「エセ」全巻の主題旋律といつてよい。そしてこの定義はパスカルのように人間を絶望と虚無の深淵に突き落すものではなく、却つて人間の内面的な豊かさと限りない深みを証明したように思われる。

この人間観はそのまゝ彼の世界観に当てはまる。彼は世界における万物を永劫流転と見たのである、こゝには古代文化の再発掘、新航路及び新大陸の発見などルネッサンスという激変の時代の影響が汲取れよう。それではこの流れ去り移り変る世界において彼はどのような生き方を選ぶであろうか。「人は同じ流れに二度入ることはできぬ」という感情から出発した彼の選んだ道、それは流れに身を投ずることであり、流転する事物の精神と一致することである。総てが絶えず流れ去る中にあつては、安定した土台、明瞭な時点は現在の各瞬間以外に求められない。彼は過去を惜まざり未来を恐れず、ただ現在こゝにあるものに対して完全であらうとする。刻々流れゆく一瞬一瞬を熟視し、全力をあげてその瞬間を捉えようとする。生に対する確固としたこの決心は彼のあらゆる思想と行動を貫いてゐる。——どんな場合にも又何事からも楽しさを見出そうとする習慣、あてどもない旅行、何時どこで死んでもよいという淡淡たる覚悟など。

およそ彼には何一つとして明確な目的がないように見え、「エセ」から茫漠とした印象を受けるのもこのためであらう。抑々モンテーニュは全体ではなく部分を、原因結果よりも経過を、存在よりも推移を、獲物より狩獵そのものを狙っている。いわば彼は常に途上にいると言えようか。彼は各瞬間の変化を尊重し、多様を多様と

して承認する。連続した流れを堰止めずに、瞬間瞬間を描くことによつて生の推移を写し出そうとしたのである。《*Je ne peints pas l'estre. Je peints le passage.*》(III. I. 27) しかしながら多様と変化を尊重し、こゝから生の果実を得んとすれば、この多様と変化に眩惑されてはならない。常に特定の対象に固執せず他を顧慮する必要がある。それには生の流れにある自己を熟視することが、自己を含めたあらゆる事物の客観視が、生の充実をもたらす。かくて個々の対象から一定の距離を保ち、流れに溺れずに生を充実するべく彼の選んだ生き方こそ、均衡に他ならない。モンテーニュの均衡——それを懷疑主義でも快樂主義でも何とでも呼ぶがよい——それは一方では多様性を尊重し、他方では或る距離を置くことにより事物の多様性を最大限に生かそうとする手段である。何事にも偏向せず均衡を保てば、それだけ広い世界に生き、それだけ多くの果実を得ることができよう。それはあらゆることに関与しながら何事にも無関心な態度である。よし感激の絶頂がないとしても、終始厚味のある、各瞬間の高揚された生き方と言えよう。

モンテーニュはあれほど自己の怠惰と無頓着を喧伝したにも拘らず、彼こそ絶えず努力し探求を続ける真に活動的な人間であつた。諸条件の対立とその均衡保持は、彼の意識を目覚ませ、不断の緊張感を生み出した。彼の生は均衡によつてこそ、日々に新たなものとなる。均衡、それは充実した生を生きる積極的手段なのである。